

平成 26 年 5 月 9 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520097

研究課題名(和文) 装飾と「他者」 - 両大戦間フランスを中心とした装飾の位相と「他者」表象

研究課題名(英文) Decoration and the "Other" : The phases of the decorative arts and the representations of the "Other" in France around the interwar period

研究代表者

天野 知香 (AMANO, Chika)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：20282890

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：本研究により、(1)植民地主義を背景とした19世紀半ば以降のフランスを中心とした文様や装飾芸術をめぐる批評的、学問的、および手引書など実践的な主な言説における「他者」の概念配置と美学形成との関わりを明らかにし、通常20世紀美術で論じられる「プリミティヴィズム」の構造を明確にした。さらにジェンダー的、民族的「他者」観と結びついた20世紀のモダニズムの言説における装飾否定の構造を示した。(2)両大戦間を中心とした漆に代表される「他者」性を帯びた素材や技法、さらに意匠や図像の流行を、具体的な作例から検証し、アール・デコの特質やモダニズムとの関わりにおいてその意味を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：(1) Based on the background of colonialism, I clarified the placement of the "Other" and its relationship with the aesthetics in the main practical, critical, academic discourses over the decorative arts and ornaments in the mid-19th century France, and I identified the conceptual structure of the "Primitivism" usually discussed in the 20th century art. I also analyzed the negation of decoration in the discourses of modernism, connected with the view of the "Other" in gender and race at that time. (2) I studied the vogue of materials, like lacquer decoration, techniques, ornaments and images which come from the non-occidental cultures after the first world war in France, in relation to the characteristics of Art Deco and modernism.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・美術史

キーワード：装飾芸術 他者 フランス 両大戦間 19世紀 プリミティヴィズム アール・デコ モダニズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者はすでに19世紀後半から第一次大戦までのフランスにおける制度や言説、実践の歴史を通して、「装飾」と「芸術」の位相を明らかにする研究を行い1994年の博士論文、及び2001年の著書で成果を発表した。その際、「装飾」をめぐる言説や実践に伴う諸問題が、女性や非西欧の人々といった、当時のフランスの主流の社会における「他者」の概念や表象と強く結びついていることを認識した。とりわけ、植民地主義が絶頂期を迎える両大戦間期を含めた時代において、装飾と芸術の位相を捉え、それらをめぐる言説や表象のなかで人種的・ジェンダー的「他者」のあり方を実証的に捉え、理論化する研究が必要であると考えた。

(2) しかしこの時期の装飾芸術に関する制度や言説、社会的な状況を加味した最初の重要な研究として1990年前後に登場したデボラ・シルヴァーマン (Deborah L. Silverman, *Art Nouveau in fin-de-siècle France: Politics, Psychology and Style, Berkeley, Los Angeles, California, University of California Press, 1989*; 邦訳: 天野知香、松岡新一郎訳、『アール・ヌーヴォー』、青土社、1999年) やナンシー・トロイの研究 (Nancy J. Troy, *Modernism and the Decorative Arts in France: Art Nouveau to Le Corbusier, Yale University Press, 1991*) には、こうした「他者」と装飾の関わりを問題にする視点は、シルヴァーマンの女性をめぐる章を除けば殆ど見られなかった。一方従来のフランスをめぐるオリエンタリズム研究やプリミティヴィズム研究に関しては、ゴールドウォーター (Robert Goldwater, *Primitivism in Modern Art, New York, Harper and Brothers Publishers, 1938*; 邦訳: 日向あき子訳、『二十世紀美術におけるプリミティヴィズム』、岩崎美術社、1971年) の序文など、一部の言及を除けば、装飾芸術の領域はほとんど視野に含められていなかった。2000年に出版されたパトリシア・モルトンの研究 (Patricia A. Morton, *Hybrid Modernities: Architecture and Representation at the 1931 Colonial Exposition, Paris, The MIT Press, 2000*; 邦訳: 長谷川章訳、『パリ植民地博覧会』、ブリュッケ、2002年) は1931年にパリで開かれた植民地博覧会における建築をテーマにした意欲的な研究であった。また、2003年のヴィクトリア&アルバート美術館で行われた『アール・デコ』展 (Charlotte Benton, Tim Benton and Ghislaine Wood, eds., *Art Deco 1910-1939, London, Victoria and Albert Museum, 2003*) では、両大戦間の装飾芸術を改めて検討する貴重な試みであったと同時に、そこにおける非西欧の影響も言及されていた点で重要だったものの、あくまで「アール・デコ」の諸相の一つとしての限定的言及にとどまっていた。以上に見たように、装

飾芸術の領域における「他者」の位相を中心的な問題に据えた実証的、理論的研究は、特定の地域のフランスにおけるコレクションの研究や概説的な言及などを除けば殆ど存在しないと言って良い状況であり、本研究の意義は大きいと考えられた。

2. 研究の目的

(1) 本研究では19世紀の産業/装飾芸術復興運動の問題や流れを踏まえ、とりわけ両大戦間を中心としたフランスにおける社会的政治的心理的な状況を背景に、装飾芸術の概念的、制度的、実践的な様相を検討し、いわゆる「アール・デコ」とモダニズムの特質を検証しながら、そこにおけるジェンダー的・民族的な「他者」の位相を実証的、多面的に検討・考察する。(2) 19世紀から20世紀にかけてのフランスおよびそれに関連する範囲での装飾芸術や文様をめぐる批評的、学術的、実践的著述における「他者」の位相を明らかにする。(3) 両大戦間における漆をはじめとする「他者性」を帯びた素材や技法、意匠、図像等の広範な流行の実態を実例から検証し、フランスの当時の装飾と芸術の文脈においてその特質を考察する。特にこの時期漆装飾で活躍したジャン・デュナン、アイリーン・グレイの作例を検討する。(4) 両大戦間を中心とした装飾と芸術を横断する形で具体的な作品における「他者」表象のあり方を分析する。(5) 20世紀前半のモダニズムにおける装飾否定の言説や実践の意味を分析・考察し、そこにおける「他者」の位相を明らかにしながら、1970年代以降モダニズムを批判する形で登場する現代作家、とりわけポスト=コロニアリズムやジェンダーの視点から「他者」の問題に関心を抱いた作り手達による装飾への関心と「他者」表象の問題を検討することで、歴史的な問題の学術的な検討を今日の視点とつなげ、装飾と「他者」をめぐる総合的な考察としてまとめる。

3. 研究の方法

(1) 19世紀から両大戦間に至る、装飾芸術をめぐるフランスで出版された批評、博覧会等報告書、手引書、研究書等の主要な著作、定期刊行物等を収集・閲覧するため、フランス国立図書館、国立美術史研究所附属図書館、パリ装飾美術館図書室等で調査を行った。(2) 両大戦間を中心とした作品および資料調査のため、パリ装飾美術館および資料室、プーローニユ=ピランクール30年代美術館および資料室、ケ・ブランリー美術館及び資料室、ナンテール、現代国際資料図書館、ロンドン、ヴィクトリア&アルバート美術館古文書館図書館、ダブリン装飾美術館、ニューヨーク、メトロポリタン美術館および同図書館、パブリック・ライブラリー、ベルギーのトゥルネイ美術館、エクス=アン=プロヴァンス、国立海外古文書館、東京、国立国会図書館、国立近代美術館工芸館図書閲覧室、

東京国立博物館資料館、などに収集・展示されている作品調査および資料の閲覧を行った。加えて1931年のパリ植民地博覧会の折に建設された植民地博物館他の旧パヴィリオンや両大戦間に建設・制作され、現在も存続する建築物およびその装飾の実地調査も実行した。

(3) 海外を含めて広く現代美術の作品を調査するためベネチア・ピエンナーレやカッセル・ドクメンタをはじめとする現代美術の大規模展示や各地の美術館での展覧会において作品を調査した。

(4) 研究・分析のため文化人類学、民族学等近接関連学問領域やポスト=コロニアリズム、ジェンダー等の分析理論に関わる研究を収集・検討した。

4. 研究成果

(1) 2010年に発表した「装飾と「他者」」(永井隆則編、『デザインのカ』晃洋書房、2010年)では、モダニズム批評を代表するクレメント・グリーンバーグの発言を手がかりに、モダニズム絵画にはらまれるいわゆる装飾性の認識と、20世紀初頭の前衛的な批評及び芸術家の言説で繰り返される装飾否定をジェンダー的・民族的な「他者」との関わりで考察した。本論文では、近代的な美術史学の草創期に位置づけられるアロイス・リーゲルの様式研究が、その後の美術史では周辺化される装飾文様を扱い、加えて非西欧の文様を西洋のそれと連続した形で論じていることを指摘する一方、文様の実践的なソースブックで知られる1856年のオーウェン・ジョーンズの著作において、従来19世紀末の美術について言われるロマンティック・プリミティヴィズムの様相が見られることを論じ、19世紀において装飾と非西欧、及び女性を結びつける見解が広く存在した事例を指摘した。こうした装飾と「他者」、文様と「他者性」の結びつけは、しかし20世紀における、白人男性主体の確立と近代性を重ねあわせる前衛的な芸術家や批評家の言説において、装飾否定の根拠となった。このようなモダニズムの動きから解放された1970年代以降、フェミニズムやポスト=コロニアリズムの視点をもった多様な出自やジェンダーを有した現代美術家たちは、繊細な配慮とともに、積極的に装飾的な要素や民族的・ジェンダー的「他者性」を作品に取り込むことによって、装飾と「他者」をめぐる従来の基本的な概念構造をずらし、あるいは捉え直す試みを行った。本論文では、本研究が対象とする19世紀から20世紀にかけての装飾と「他者」をめぐる基本的な概念的枠組みを提示することでこれまで十分に指摘されてこなかった学術的な知見を提示するとともに、現在の視点からこうした見方を戦略的に喚起しつつ捉え直し、装飾文様の持続的で重層的な力を開示することで既存の構造を解き放とうとする現代美術を参照することで、従来の主流

の言説がはらむ抑圧の構造や限界を明らかにする一方、美術をめぐるあらたな語りや眼差しの姿勢を見出す可能性を示唆し、学問的成果を広く現代の社会的な視点と結びつけた点でも意義ある研究となった。

(2) 2014年に出版された論文「装飾の「プリミティヴィズム」-19世紀後半における産業/装飾芸術運動と「他者」概念の配置」(喜多崎親編、『西洋近代の都市と芸術2 パリII 19世紀の首都』、竹林舎、2014年)では、(1)の問題提起を踏まえ、その議論を補強する詳細な実証的研究として、19世紀半ばから20世紀初頭におけるフランスを中心とし、さらに関係するイギリスの状況も含めて、産業/装飾芸術や文様に関する手引書や博覧会報告、著作、批評等の言説、具体的にはオーウェン・ジョーンズをはじめ、レオン・ドラポルドやエミール・ソルディからウジェーヌ・グラッセに至る主要な著作の言説における西欧の「他者」、すなわち非西欧諸国の位置づけを具体的に検証し、モダン・アートを先取りする形で展開された装飾芸術の美学の形成において、こうした非西欧諸国と重ね合わされた特質の果たした役割を明らかにすると同時に、美術に先立って装飾芸術の領域に於いて「プリミティヴィズム」と言える状況が展開されていたことを明らかにした。またその中で、「プリミティヴィズム」についての従来の概念をより深く掘り下げて考察を展開し、ゴンブリッチやフランシス・コネリー、ディディ=ユベルマンの見解を元にその概念構造を示すことで、表層的な歴史事象の特質で語られてきた「プリミティヴィズム」の概念をより本質的な問題として捉え直した。

(3) 2013年に口頭発表し、2014年に論文「アール・デコ期における漆装飾-ジャン・デュナン」(『国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」報告書』、2014年)にまとめた研究においては、両大戦間に漆装飾で活躍した装飾家ジャン・デュナンの作品と同時代批評を詳細にたどり、分析を加える事で1920年代の「アール・デコ」の時代における「他者」性を帯びた技法、素材の一つである漆装飾の意義やあり方を明らかにすると同時に、加えて日本に由来するとされる漆装飾を実践するジャン・デュナンを同時代の日本がどのように受容したかを、当時の日本の状況や日本の装飾芸術のフランスにおける受容とも照らし合わせながら調査することで、単なるジャポニスムの延長にとどまらない日仏双方におけるハイブリッドな状況を明らかにした。本論文ではフェリックス・マルシアックのモノグラフを除くと、十分な先行研究があるとはいえないジャン・デュナンの制作活動にこれまで示されてこなかった美術史的な考察を提示したと同時に、とりわけ日本との関わりのあり方を詳細にたどることで、新知見を提示し、両大戦間フランスの装飾芸術における「他者」性の複雑な位相を

具体的事例から明らかにした。

(4) 2014 年に口頭発表した「モダニズムを差異化する-アイリーン・グレイについて」では、ジャン・デュナンに先立って第一次世界大戦以前から漆装飾を新たな視点で捉え直した作品を発表した女性芸術家アイリーン・グレイについて、素材と技法の「他者」性に加え、彼女自身が当時男性を中心としていた装飾芸術や建築の領域におけるジェンダー的な「他者」としてどのような制作活動を展開し、その作品にどのような特質を見ることができるのかを分析した。世紀末における女性と装飾芸術の関係が、主に当時のジェンダー観をもとにした装飾と女性性との観念的な重ね合わせに終わったのに対して、両大戦間には、第一次大戦後の社会状況の変化も手伝って、制作する主体として登場した女性たちが同時代の装飾や芸術のあり方を自らの視点で捉え直す状況を具体的に指摘することができる。世紀末において室内装飾に対する関心の高まりの場となった男性中心の唯美主義的室内のあり方は、中産階級の女性たちによるその普及を経て、第一次大戦後の自立した女性芸術家や芸術に関心のある女性たちによる女性自身のための室内構成へと移行/展開すると考えることができ、グレイはこうした文脈で一定の役割を果たした。本論文ではグレイの初期の装飾や建築の仕事を中心に、具体的な事例からその特質を指摘すると同時に、両大戦間の彼女の活動を支えたパリにおける、主流から逸脱したセクシュアリティを帯びた外国人を中心とする女性芸術家グループの交友の意義を指摘した。

(5) 以上の主要な研究成果は、国内のみならず国際的な研究レベルにおける新知見を含んでおり、実証的・理論的研究の双方の側面から学術的な意味を有したと考える。(3)の研究を発表した国際シンポジウムにおいても、海外の研究者から大きな反響を得ることができた。研究目的の(1)(2)(3)(5)について研究期間内に十分な成果を示すことができた判断するが、目的(4)にあげた「他者」表象の研究に関しては、2011年の論文「「他者」をめぐる交錯するまなざし-里見宗次と『オリエント・コルズ』」(『美術フォーラム 21』)で、里見の有名なポスターに関する注文状況の新知見や図像ソースの仮説を提示し、両大戦間フランスの人種表象に顕著な図像のタイプ化の問題の指摘を含めて一部発表した。すでに蓄積してきた残りの調査・研究の成果を期間内に発表するに至らなかったため、これに加えて今後本研究全体をまとめた研究成果として提示するつもりである。今回の研究は 19~20 世紀両大戦間のフランスの美術・装飾芸術に関する研究、および「プリミティヴィズム」研究、美術史におけるポスト=コロニアリズムやジェンダーの視点からの研究に寄与するものとする。また本研究は今後さらに事例を

加え、視点を深めてその内容を展開してゆることが可能であると考え、今後の研究につなげてゆきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

天野知香「アール・デコ期における漆装飾-ジャン・デュナン」、『国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」報告書』、2014 年 1 月、査読無、pp.91-106

天野知香「「他者」をめぐる交錯するまなざし」-里見宗次と『オリエント・コルズ』」、『美術フォーラム』、醍醐書房、2011 年 5 月、Vol.23、査読無、pp.128-132

天野知香「時代の徴候-"アール・デコ"とその周辺」、『ドレスタディ』、京都服飾文化研究財団、査読無、56 号、2009 autumn、pp.4-13

天野知香、「パリのミュシャと『装飾芸術』の時代」、『ユリイカ』、青土社、査読無、2009 年 9 月、pp.63-77

[学会発表](計 2 件)

天野知香「モダニズムを差異化する-アイリーン・グレイについて」、鈴木杜幾子先生企画ラウンド・テーブル「西洋美術の女性芸術家：作家・表象・研究-ジェンダー論の視座」、明治学院大学白金校舎 2 号館 2301 教室、2014 年 2 月 22 日。

天野知香「アール・デコ期における漆装飾-ジャン・デュナン」、日本女子大文化学科主催、ジャポニスム学会協力、国際シンポジウム、[装飾とデザインのジャポニスム]、日本女子大学新泉山館 大会議室、2012 年 12 月 15 日。

[図書](計 2 件)

天野知香、喜多崎親、他、『西洋近代の都市と芸術 2 パリ II 19 世紀の首都』、竹林舎、2014 年、510 (177-207)。

天野知香、永井隆則、他、『デザインの力』、晃洋書房、2010 年、246 (60-88)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天野 知香 (AMANO, Chika)
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授
研究者番号：20282890

(2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者
なし